「万引に関する青少年意識調査」パネルディスカッション開催

生活満足度と万引犯罪との関連性に着目

全国万引犯罪防止機構（東京都新宿区、河上和雄理事長、TEL03・3355・2322、以下万防機構）は、文部科学省、警察庁の協力の下、今回で8回目となる「万引に関する青少年意識調査」分析報告書を発行。同調査は万引犯罪に対する青少年の意識を全国統一の調査票で把握。年代、男女、地域別分析に用いる基礎データを収集することで、防犯対策などに活用することを狙いとしている。調査票は全国の小学5年生、中学2年生、高校2年生を対象に47都道府県の小・中・高の中から各47校、計141校、約1万2000人を対象に実施。回収率は98・1%。

調査報告書は以下の内容で構成。

序章「本調査の狙い」
第1章「自分の生活に関する事柄についての満足度」
第2章「万引に対する基本的意識」
第3章「万引との関わり」
第4章「万引少年に対する対応」
第5章「規範意識の育成という課題」
まとめ「調査報告の概要」

今回の報告書発行にあたり、万防機構ではパネルディスカッションを開催。編集に携わった坂井昭弘桜美林大学教授をコーディネーター、パネリストに万防機構の樋口建史監事（前警視総監）に加え、坂井教授とともに編集を行った瀧川哲夫北海道大学名誉教授、児玉聡京都大学准教授、奥田太郎南山大学准教授が参加した。

はじめに坂井教授がパネルディスカッションの趣旨を説明。今回の調査では、万引きを核とする青少年の規範意識の解明を目的として、設問項目を見直し、調査項目に対し新たな視点から分析を試みた。単に青少年が万引きに対してどのように考えているかだけでなく、もう一歩踏み込んでどうしてそういう風に考えるのかを解明することを目的に追加。そして具体的に調査結果に何らかの偏りや逸脱が見られるなら、それを一般の社会規範と道徳性の発達という2つの視点から分析し、そのような偏りや逸脱に対して、どのように対応すれば良いのか、どのような対応すべきかに関する一定の指針を導き出すことが可能になるように調査項目を整理した旨を紹介。議論の主題として、今回の報告書をどのように万引防止対策に活用していったら良いのか。活用していくためには、本調査をどのような形で行えば良いのかと述べた。

調査報告の概要

そして瀧川名誉教授が、調査結果の概要について説明。

調査項目は①万引についてどのように考えているか②万引と他の禁止行為との比較（今回から全面的に修正追加）③万引をしてはいけない理由は何か（今回から追加）④万引をする理由は何か⑤万引に誘われたことがあるか⑥万引に誘われたらどうするか⑦アルバイト店員として、子どもの万引を目撃したらどうするか（前回から追加）⑧万引しやすい店を知っているか（同）⑨万引をした子どもを捕まえた店は警察に通報するべきか⑩万引をさせないための保護者の接し方（今回から追加）⑪万引をした子どもや保護者（親）はどのような償いをするべきか⑫子どもが万引をしなくなるためにはどうしたらよいか⑬万引をさせないための店の取り組みを知っているか⑭万引をさせないための学校や警察の取り組みを知っているか⑮日常生活における7種類の満足度評定（同）。

報告書の構成は、調査票の設問順ではなく分析する立場として、前提としてこういうものから始めた方が良いとの判断に基づいた構成になっている。第1章で主に生活満足度の問題。第2章からは各設問の万引きに対する基本的な意識の問い。第3章で友達から万引きに誘われたらどうするかといった事柄。第4章は社会的な状況として、万引きをした子どもに対してどういう状況が成り立っているのかを問う形。効果的な万引対策、青少年の目から見た店舗の経営の仕方が見えてくるとの見方を示した。

第5章は坂井教授が中心となってまとめたもので、規範意識の項に関して規範意識とは何なのか。規範知識とどう違うのかが疑問だったとした上で、余りに簡単に規範意識の育成という言葉が使われているが、それは何か。例えば万引きは悪いことだということは、ほぼ皆が知っている。知っているのに実際にやってしまうということの違い、その問題を突っ込んで論じてもらったと記載した背景を説明。

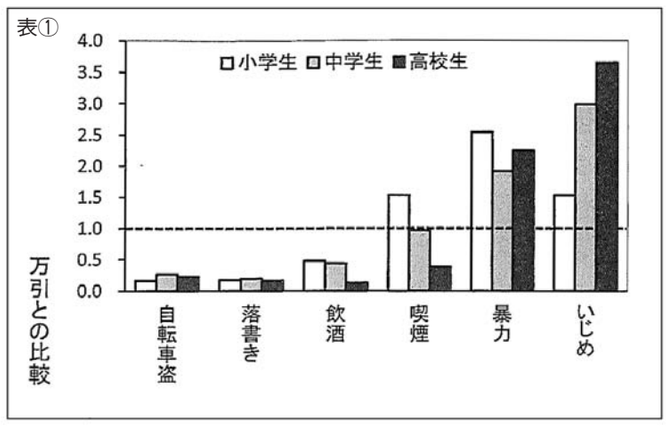
今回の調査項目は、青少年の特徴的な態度をより明確化させることを目的に設計。特に項目②「万引と他の禁止行為との比較」と⑮「日常生活における7種類の満足度評定」を調査の目玉として取り上げた。

「万引と他の禁止行為との比較」では、万引との比較で放置自転車盗、未成年飲酒、未成年喫煙、いじめ、建物への落書き、暴力のどちらが悪いと思うかを尋ねた。その結果、以下の結果となった。

（悪いと思う順に）
小学生①暴力②いじめ、未成年喫煙③万引④未成年飲酒⑤放置自転車盗⑥落書き
中学生①いじめ②暴力③万引、未成年喫煙④未成年飲酒⑤放置自転車盗⑥落書き
高校生①いじめ②暴力③万引④未成年喫煙、放置自転車盗⑤落書き⑥未成年飲酒

この結果を見ると、「万引が悪さの点で、他の青少年がやりかねない逸脱行為との関係の位置を見付けることができた」。そこで若干複雑な数式を利用。総合的に見ると1・0の線より下だと「万引の方が悪い」、上だと「万引より悪い」形となる（表①）。

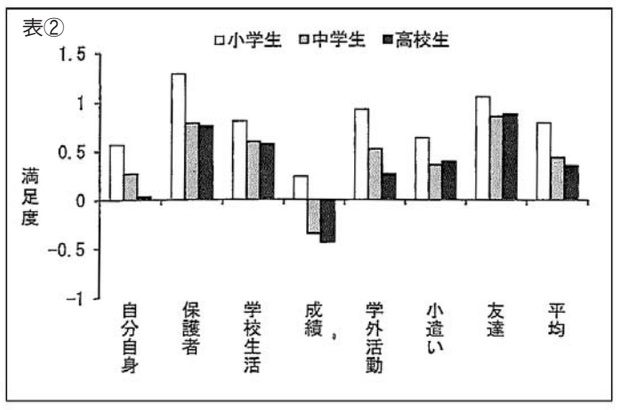
表①



「日常生活における7種類の満足度評定」では、「とても不満である」（マイナス2）「あまり満足していない」（マイナス1）「どちらでもない」（0）「まあまあ満足している」（プラス1）「とても満足している」（プラス2）と満足度を5段階設定。その上で、自分自身、保護者、学校生活、成績、スポーツや習い事など学外活動、小遣い、友達づきあいを対象に5段階の満足度でどの位置かを尋ねた。

その満足度評定は以下の通り（表②）。

表②



この設問について、青少年が日常生活で色々なことに関して、自分を巡る様々な事柄について、どれくらい満足度を持っているのか、不満なのかを新たに入れて、それとの関係で特に万引きに関する事柄を絡めて眺めたいと項目に追加した理由を説明。また、全体を通じて、満足度と各設問が回答にどういう違いをもたらしているかも今回の分析の目玉であるとした。

万引についてあなたはどのように考えていますか。ひとつだけ選んでください＝①絶対にやってはいけないこと②やってはいけないことだが、さほど問題ではない③よくあることで、何も問題はない

小学生、中学生、高校生ともに、90%以上は「絶対にやってはいけない」と捉えている。だが、法律で万引は禁じられていると知っていながら、「大きな問題ではない」＋「何も問題ではない」が8%程度に及ぶ。

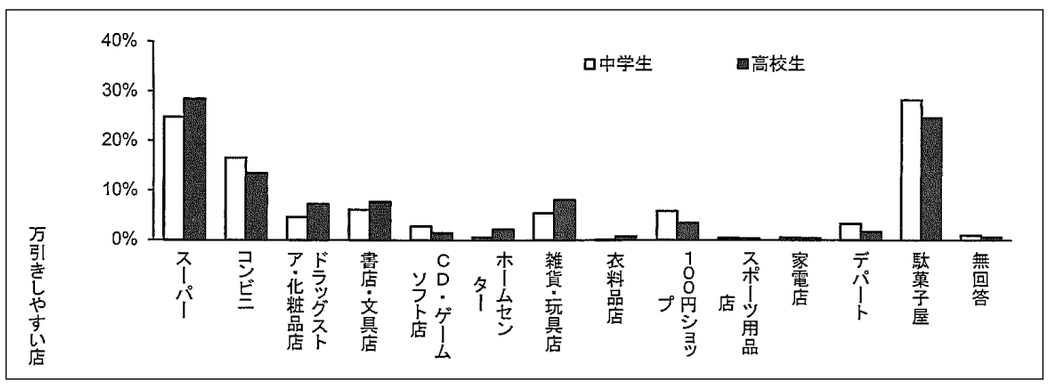
この1年の間に、あなたは万引をしようと誘われたことがありますか＝①ある②ない

「ない」が大多数だが、「ある」が小学生2・4%、中学生4・0%、高校生2・1%。「ある」と答えた回答を地域別に並べると、最も多いところで9%以上に達する。

また、中学生、高校生を対象に、あなたの住んでいる近くで、万引をしやすいと言われている店を知っていますか。ひとつだけ選んでください＝①知っている②知らない

中学生18・6%、高校生19・2%と2割近い子どもが「知っている」と回答。更にどういう店かを聞くと「スーパー」（中学生24・7%、高校生28・4%）と「駄菓子屋」（中学生28・1%、高校生24・5%）が多く、次いで「コンビニ」（中学生16・5%、高校生13・4%）が続く（表③）。

表③



そして、万引きと生活満足度の関係で見た場合、余り良くない回答をしている場合には、生活満足度も低い場合が多い結果だったことを紹介した。

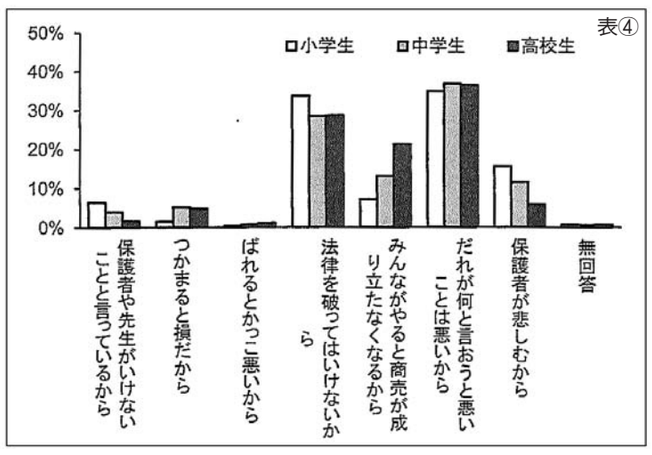
児玉准教授は、第2章「万引に対する基本的知識」、第3章「万引との関わり」について報告。

今回の調査で、少年たちに万引きをしてはいけない理由を初めて設問に加えている。

万引をしてはいけない理由として、もっともだと思うものをひとつだけ選んでください＝①保護者や先生がいけないことと言っているから②つかまると損だから③ばれるとかっこ悪いから④法律を破ってはいけないから⑤みんながやると商売が成り立たなくなるから⑥だれが何と言おうと悪いから⑦保護者が悲しむから

回答では、「だれが何と言おうと悪いことは悪いから」が小中高ともに最も多く、小学生34・8%、中学生36・7%、高校生36・3%に達した。次に「法律を破ってはいけないから」で小学生33・6%、中学生28・4%、高校生28・6%（表④）。

表④



小学生では多かった「保護者が悲しむから」「保護者や先生がいけないと言っている」の回答が、中学生、高校生では減少。逆に「みんながやると商売が成り立たなくなるから」は、高校生、中学生、小学生の順で学年が上がるほど増加している。

生活満足度と万引の関係を見ると、「絶対にやってはいけないこと」と回答する人は平均的な回答に沿った傾向にあるが、「大きな問題ではない」とか「何も問題ではない」という回答は、生活満足度が低い人ほど多い傾向にある。また、万引きをしてはいけない理由に対しても、全体的には「誰が何と言おうと悪いことは悪いから」「法律を破ってはいけないから」といった答えが非常に多い。他方、生活満足度が低くなると「つかまると損だから」「ばれるとかっこ悪いから」という自己利益に訴える回答が増加。生活満足度が高いと「みんながやると商売が成り立たなくなるから」「だれが何と言おうと悪いことは悪いから」といった模範的な回答が増えている。

先に発表した「この1年の間に、あなたは万引をしようと誘われたことがありますか」の問いには、「ない」が圧倒的に多く、「ある」は全体の1割にも満たない。だが、生活満足度で見た場合、特に中学生で非常に生活満足度が低い傾向が見られる。生活満足度が普段から低い人ほど、万引に誘われる環境にあると考えられる。

友達から万引しようと誘われたら、その友達にあなたはどう対応しますか＝①友達の誘いは断れないので、仲間に入る②友達の誘いをはっきり断る③友達の誘いをあいまいな態度で無視する④友達の誘いをはっきり断り、万引は犯罪であると注意する

小学生では「友達の誘いをはっきり断り、万引は犯罪であると注意する」との回答が76・0%に達する一方、中学生は37・3%、高校生は30・0%に止まる。「友達の誘いをはっきり断る」は、先の回答とは逆に中学生38・8%、高校生45・9%と多く、小学生は16・3%。「友達の誘いをあいまいな態度で無視する」は中学生21・0%、高校生22・1%と一定割合あり、回答結果だけを見た場合には、誘いには乗らないが相手に注意もしない割合が中学生59・8%、高校生68・0%と過半数以上に達する。

小学生は「友達の誘いをあいまいな態度で無視する」より、「友達の誘いをはっきり断り、万引は犯罪であると注意する」だが、中学生になると人間関係もあり、あいまいな態度で無視、はっきりと断るが万引は犯罪であると注意する傾向が下がってくる。その結果、人間関係も大事にしつつ、万引を断るという回答が多い。生活満足度との関係では、「友達の誘いは断れないので、仲間に入る」（小学生0・45、中学生マイナス0・28、高校生マイナス0・04）、「友達の誘いをあいまいな態度で無視する」（小学生0・26、中学生0・25、高校生0・21）は満足度が低くなっている。生活満足度が低い場合、万引の誘いに乗ってしまう、どっちつかずの答えをしてしまう傾向にあることがわかる（表⑤）。また、「あなたの住んでいる近くで、万引をしやすいと言われている店を知っていますか」の問いに対して、2割程度が知っていると回答しているが、そうした回答をした向きの生活満足度が低いことも明らかとなっている。

ここまでを纏めると、生活満足度の高さと規範意識の高さには、かなり相関関係が見られる。生活満足度を上げるのは難しい問題だが、中長期的には生活満足度、例えば自尊感情、自己肯定感などを高めるという課題が規範意識だけではなく、非行防止に繋がるのではないかと思われる。長期的な課題になるとは思うが、青少年の健全育成も重要ではないか。

そして、「万引と他の禁止行為との比較」は面白い結果が出たが、どう解釈するかは難しい。万引は順当な所にあるか、或いは万引について小中高生は考え方を改めるべきだと考えるべきかについては議論が必要なところだ。議論になったのは、放置自転車の乗り逃げは、小中では飲酒よりも後にあるのはどう考えるべきなのかという点。何故小中高でこのような違いが生まれるのか、これが成り立たなくなるから⑥だれが何と言おうと悪いことは悪いから⑦保護者が悲しむから

回答では、「だれが何と言おうと悪いことは悪いから」が小中高ともに最も多く、小学生34・8%、中学生36・7%、高校生36・3%に達した。次に「法律を破ってはいけないから」で小学生33・6%、中学生28・4%、高校生28・6%（表④）。

小学生では多かった「保護者が悲しむから」「保護者や先生がいけないと言っている」の回答が、中学生、高校生では減少。逆に「みんながやると商売が成り立たなくなるから」は、高校生、中学生、小学生の順で学年が上がるほど増加している。

生活満足度と万引の関係を見ると、「絶対にやってはいけないこと」と回答する人は平均的な回答に沿った傾向にあるが、「大きな問題ではない」とか「何も問題ではない」という回答は、生活満足度が低い人ほど多い傾向にある。また、万引きをしてはいけない理由に対しても、全体的には「誰が何と言おうと悪いことは悪いから」「法律を破ってはいけないから」といった答えが非常に多い。他方、生活満足度が低くなると「つかまると損だから」「ばれるとかっこ悪いから」という自己利益に訴える回答が増加。生活満足度が高いと「みんながやると商売が成り立たなくなるから」「だれが何と言おうと悪いことは悪いから」といった模範的な回答が増えている。

先に発表した「この1年の間に、あなたは万引をしようと誘われたことがありますか」の問いには、「ない」が圧倒的に多く、「ある」は全体の1割にも満たない。だが、生活満足度で見た場合、特に中学生で非常に生活満足度が低い傾向が見られる。生活満足度が普段から低い人ほど、万引に誘われる環境にあると考えられる。

友達から万引しようと誘われたら、その友達にあなたはどう対応しますか＝①友達の誘いは断れないので、仲間に入る②友達の誘いをはっきり断る③友達の誘いをあいまいな態度で無視する④友達の誘いをはっきり断り、万引は犯罪であると注意する

小学生では「友達の誘いをはっきり断り、万引は犯罪であると注意する」との回答が76・0%に達する一方、中学生は37・3%、高校生は30・0%に止まる。「友達の誘いをはっきり断る」は、先の回答とは逆に中学生38・8%、高校生45・9%と多く、小学生は16・3%。「友達の誘いをあいまいな態度で無視する」は中学生21・0%、高校生22・1%と一定割合あり、回答結果だけを見た場合には、誘いには乗らないが相手に注意もしない割合が中学生59・8%、高校生68・0%と過半数以上に達する。

小学生は「友達の誘いをあいまいな態度で無視する」より、「友達の誘いをはっきり断り、万引は犯罪であると注意する」だが、中学生になると人間関係もあり、あいまいな態度で無視、はっきりと断るが万引は犯罪であると注意する傾向が下がってくる。その結果、人間関係も大事にしつつ、万引を断るという回答が多い。生活満足度との関係では、「友達の誘いは断れないので、仲間に入る」（小学生0・45、中学生マイナス0・28、高校生マイナス0・04）、「友達の誘いをあいまいな態度で無視する」（小学生0・26、中学生0・25、高校生0・21）は満足度が低くなっている。生活満足度が低い場合、万引の誘いに乗ってしまう、どっちつかずの答えをしてしまう傾向にあることがわかる（表⑤）。また、「あなたの住んでいる近くで、万引をしやすいと言われている店を知っていますか」の問いに対して、2割程度が知っていると回答しているが、そうした回答をした向きの生活満足度が低いことも明らかとなっている。

ここまでを纏めると、生活満足度の高さと規範意識の高さには、かなり相関関係が見られる。生活満足度を上げるのは難しい問題だが、中長期的には生活満足度、例えば自尊感情、自己肯定感などを高めるという課題が規範意識だけではなく、非行防止に繋がるのではないかと思われる。長期的な課題になるとは思うが、青少年の健全育成も重要ではないか。

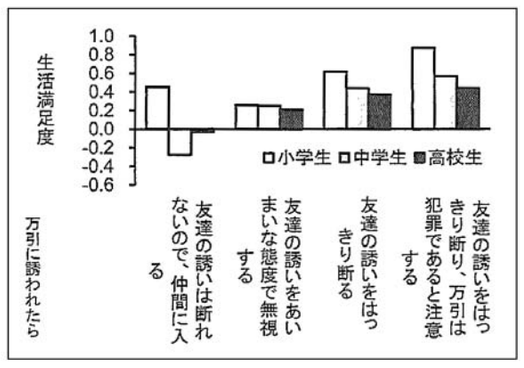
そして、「万引と他の禁止行為との比較」は面白い結果が出たが、どう解釈するかは難しい。万引は順当な所にあるか、或いは万引について小中高生は考え方を改めるべきだと考えるべきかについては議論が必要なところだ。議論になったのは、放置自転車の乗り逃げは、小中では飲酒よりも後にあるのはどう考えるべきなのかという点。何故小中高でこのような違いが生まれるのか、これがやると商売が成り立たなくなるから」と言うのは、小学生にとって余り重要な理由ではない可能性があるので、どういう時に、どのような説明をするべきかを今後考えていかなければならないとの考え方を示した。

奥田准教授は、第4章「万引少年に対する対応」の中で、興味深かった点について説明。

（中高生のみ）万引をした子どもを捕まえた店は、警察に通報すべきだと思いますか＝①そう思う②そう思わない

結果は「そう思う」が中学生73・4%、高校生68・3%。「そう思わない」が中学生25・7%、高校生31・0%。

表⑤



回答と生活満足度の関係を見ると、「そう思う」と答えた中学生の生活満足度（平均）は0・49、高校生は0・39。「そう思わない」は中学生、高校生とも0・27。中高では「そう思わない」と回答した生活満足度が変わらない。「そう思う」と回答した向きは、中高ともに生活満足度が高く、今回の調査全般で見られる結果だった。

ここから考えられる点として、生活満足度が低くなると、自分が属している社会の規範に対して信頼を持てなくなる。その結果、規範を守らなくても良いと思うようになるのではと予想。

そして、「そう思わない」（警察に通報すべきだと思わない）と答えた人だけに聞きます。その理由をひとつだけ選んでください＝①万引は大した犯罪ではないから②子どもなら誰でもやることであり、放っておけばそのうちやめるから③品物は

坂井昭弘桜美林大学教授

瀧川哲夫北海道大学名誉教授

児玉聡京都大学准教授

奥田太郎南山大学准教授